吉田山丘陵地東斜面における景観構成の研究

京都大学大学院　学生会員　○出村嘉史
京都大学大学院　　正会員　　川崎雅史

１．研究の背景と目的

筆者は現在までに、京都東山の一部に当たる円山公園界隈の景観構成を研究した。円山公園には地形の特徴に基づいた遊興文化が近世に発生したが、近世から公園になった現代に渡って、大きな山辺の視覚的なつながりを根本とした景観デザインによって統一性を獲得していた。本研究は、山辺における公共的空間が、ランドスケープの構成によって、如何に文化的空間として演出され得るかを明らかにする一連の研究の一部と位置付けられる。対象地の京都吉田山は、京都市街地に孤立する小高い丘である。ここには吉田神社を始めとする宗教文化的な領域が展開してきたが、近代に入って一部が数寄の空間として開発された。本研究の目的は、このような吉田山の東斜面部に注目し、丘陵地の地形を基礎としたランドスケープの構成を細かく分析することによって、文化的な空間を演出するに至った立体的な構成を明らかにすることである。

本研究対象地の吉田山（神楽岡）、あるいは東山一帯を扱った研究には、都市とのつながりを探ろうとするものや、建築様式を見出そうとするものなど、多岐に渡る蓄積が見られるが[i]、山辺における具体的な文化活動と結びついた空間の構成デザインに言及した研究は希少である。本研究は、実測に基づく景観構成の把握をし、その上で文化的空間が演出される仕組みを解明しようとする点に新規性がある。

２．都市の中における吉田山の位置付け

対象地の場所的固有性を把握するため、地理環境的な位置付けと歴史の概観をまとめる必要がある。

吉田山は京都東山の一つに数えられるが、実際は孤立丘であり、周囲を平地に囲まれている（図 1）。平安京へ向かって東山より一歩手前に独立して存在する吉田山は、町との関わりを持ちつづけてきた。

この丘陵地は、古代に吉田神社が築かれ、さらに斎場所が設けられると、宗教的に強大な地位を獲得した[ii]。同時に名所としても認識されるようになり、近世にはしだいに庶民の屋外の遊び場となった[iii]。

近代に市域が拡大すると、吉田山は市内へと含まれて、吉田村が文教地区として都市化の先駆けとなった。この時、山荘などの数寄空間や住宅地として、主に東山と向かい合う吉田山東斜面が開発された。これらが本研究の主対象となる**図２**の領域である。

現在は都市の中に残された緑地として重要な存在となり、数寄の空間が一般に開かれ、そこにおける芸術活動などを見るようになった。

３．景観の構成 ― 稜線から東中腹の山荘

東斜面の上部、すなわち稜線から東中腹にかけて広がる庭園は、大正末から昭和の初めかけて、運輸業で財をなし裏千家老分であった谷川茂次郎氏（雅号が茂庵）によって造営された広大な茶の湯の空間であった。昭和の初期には定期的に大規模な茶会が催された[iv]。この茂庵庭園は茶室のある幾つかの平場と、斜面を意図的に昇り降りする苑路で構成されて、茶室などの建築や苑路の配置や向きにより、これらを含む周辺の景観と主要な視点場が、広い庭園の中で特定の場所に決定される（**図３**）。これらの景観は、石垣と植栽、建築によって近景がつくられ、その背後の遠景（眺望）とダイレクトに結びつく。近景では、特に斜面上に意図的な起伏を設け、3 次元的に重なる層ができている。例えば、現在に残る茶席である田舎席周辺では、斜面を切り込んで石垣による３段の層を、茶室前の井戸を囲い込むように設け、さらに茶室から張り出す舞台によって、高低差の臨場感を演出している（**図４**）。

これらの領域は、現在では Cafe、あるいは公園といったいわば公共的な空間の使い方をしながら、別邸としての私的な数寄空間として培われてきた、景観を愉しむ為の設えを多く持ち続けている。

４．景観の構成 ― 吉田山東中腹の住居群

茂庵庭園から東に続く中腹斜面には、斜面上に段地を設けた構成で（**図５**）美しく整った家並みが存在する。ここは、東山、特に大文字と向かい合い、それに対する絶好のビューポイントであり、そもそもこの場所の価値を鑑みて、品格の高い街並を形成する意図があったに違いない。これらは先に紹介した谷川氏によって借家として開発されたものである。先の茶室と同様に銅板葺の屋根で統一された木造の建築を始め、路地、階段など基本的な景観構成要素は極めて簡素で規

Key Words：　丘陵地、京都吉田山、庭園、空間整備・設計、ランドスケープ
〒606-8501　京都市左京区吉田本町　京都大学大学院工学研究科環境地球工学専攻　Tel＆Fax 075-753-5123

則的な構成であるが、区画の並びは縦横を揃えず、やや歪ませることによって、そのずれによって極めて上下、あるいは前後の不規則な立体的関係が生じ、景観の多様性に繋がっている（図６）。これらの多様性は、秩序的にデザインされた中の細かな「破り」から生じている為、全体の景観には統一性が存在する。

これらの家並みは、建築の所有者を戸別に替えながら現在まで存続し、現在は数棟が新たな装いで立て替えられてはいるが､特に景観意識の高い住人によって、その生活美が守られ、培われている。

５．結論

吉田山東斜面における大規模な景観は、周囲の環境とここの遊興史の上に、意欲的に文化を意図した施主の莫大な富を背景にして以上のように構成された。このとき形作られた、斜面上の微地形を活かして立体的に空間を重ねる構成は、その後にここを利用する人々に、文化的意識を持たせるに至り、諸活動の舞台として活用されるようになった。

---

i　中川等：近代京都における住宅の発展に関する考察，京都大学工学部建築学科卒業論文，1980.3/矢ケ崎善太郎：近代京都の東山地域における別邸群の初期形成事情，日本建築学会計画系論文集 第507号，pp.213-219，1998.5／中嶋節子：近代京都における市街地近郊山地の「公園」としての位置付けとその整備，日本建築学会計画系論文集 第496号，pp.247-254，1997.6／山田圭次郎：多層認識モデルによる敷地の研究，土木計画学研究・講演集 No.23(2)，pp.605-608，2000.11 他

ii　京都市編：京都の歴史　第７巻、p342-344、1979.10

iii　晴翁木村明啓：花洛名勝図会、須原屋茂兵衛、東山 2-49、1862.9

iv　今日庵:茶道月報大正 15 年 8 月号～昭和 3 年 12 月号､1926-1928

図１　都市の中の吉田山

図２　東斜面の対象地域

図３　茂庵庭園における苑路、建築の配置

図４　田舎席周辺の空間構成

図５　茂庵庭園と住宅群の断面図

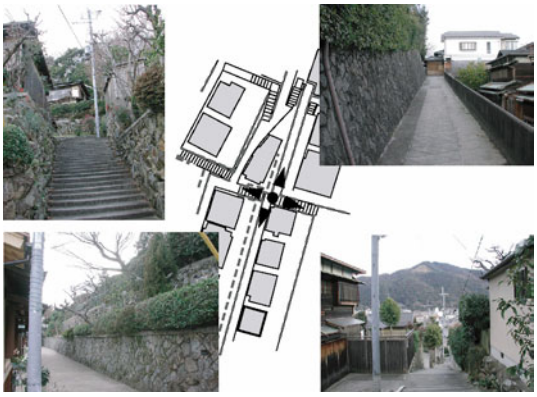

図６　区画の結節点における景観の多様性